

## 教皇フランシスコの遺産：神学的評価に関する小論

大胆な行動と抜本的な改革が特徴だった12年間の在位を経て、教皇フランシスコは一つの神学的遺産を残しましたが、それは対照的な特徴を持っていました。

一人の教皇が司教団の内部に、これほど表立った反対を引き起こしたことは、何世紀にもわたりありませんでした。一部の枢機卿はフランシスコに対して、公に「ドゥビア (Dubia)」（疑問）を公表しました。それと同時にフランシスコは、教会内の最も進歩主義的な潮流から、絶え間のない支持を受けていました。フランシスコの教皇職には、誰もが無関心ではいらなかったのです。

したがって、フランシスコの教皇職の構造と内的論理を明確にするためには、その最も目立つ側面を特定するのが適切です。この分析を通して、フランシスコの改革を導いた神学的決定のみならず、彼の取り組みを形成し、教会の歴史に継続的なしるしを残したグローバルなビジョンについても理解を深めようと試みます。

### 1. フランシスコ以前：ホルヘ・ベルゴリオの社会政治的神学

初めてのイエズス会出身の教皇であり、米大陸出身者としても初めての教皇である、フランシスコの教皇名で選出されたホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿は、選出された夜、「地の果て」から来たと自己紹介しました。この簡潔な言葉は、すでに断絶を予感させるものでした。なぜなら、教会は数世紀をへてはじめて、それまで歴代教皇を輩出してきた歴史的揺籃の地である古き欧州の出身の教皇によって統治されなくなったからです。

#### 1. 1. 出自と司祭養成

イタリア人の両親（父親はイタリア半島生まれ）の息子ホルヘ・ベルゴリオは、家族の歴史に深く影響を受けています。移民の子として、彼は生涯を通じて移民問題に特別敏感であり、受け入れる国にとって、その国を豊かにする源泉として移民を捉え、無条件にもてなす義務を強く主張しました。この個人的な経験もまた、欧州に対するある種の批判的な距離感を育むことになりました。彼は、欧州は疲弊し、年老い、そして時には閉ざされていると感じていたのです。

22歳でイエズス会に入会し、1969年12月、33歳で司祭に叙階され、まず修練院長、次いで管区長と、急速に昇進していきました。この時期はアルゼンチンが非常に緊張していたころでした。1976年3月24日の軍事クーデターにより、国は軍事政権の支配下に置かれました。この激動の政治情勢の中で、ラテンアメリカの教会は、既に本格的になっていた解放神学の台頭によって大きく揺り動かされました。(1)

この運動はマルクス主義の諸概念に基づいており、革命的断絶を主張し、さらにはローマによって正式に断罪されたものですが、ホルヘ・ベルゴリオは、解放神学の運動を、積極的に支持することはありませんでした。それにもかかわらず、後の教皇フランシスコは「人民の神学」(theology of the people)として知られる、より穏健な分派に引き付けられ、これが彼の考え方と司牧的アプローチの両方に深く影響を及ぼすことになるのです。

#### 1. 2. 「人民の神学」：知恵の声に耳を傾ける

「フラテリ・トゥッティ」(Fratelli tutti)の中で、フランシスコは「人民」という概念を道具にしようとする誘惑を強調しています。「ポピュリズムを、社会の現実を解釈するための鍵と見なそうとする試みは(2)、

(中略)『人民』という言葉の正当な意味を無視するものです。これは、『人民による統治』という民主主義の概念そのものの消滅につながる可能性があります」(3)。

フランシスコにとって、人民とは、単なる匿名の大衆でも、直接的な現実でもありません。彼は、それを次のように説明します。「人民の一員となることは、社会的・文化的絆から生じる共通のアイデンティティを持つ一員となることです。そしてそれは、自動的なものではなく、むしろ共通のプロジェクトに向かって前進する(中略) ゆっくりとした困難なプロセスなのです」(4)。

このように、彼は、人民の心を見抜いて、人民の願望を表現できる真の大衆指導者と、集団文化を自らの個人的な権力のために利用する扇動的な指導者とを区別しています(5)。この区別によって、彼の教皇職における鍵となる解釈の原則を識別できます。すなわち、教会は人民とともにあるべきであって、人民を操作すべきではないということです。

「人民の神学」が位置づけられているのは、まさにこの概念の文脈の中です。それは、共同体、特に最貧困層の人々の声に耳を傾けることを強調します。この神学は、この人々を、神学的根拠(loca)、すなわち天主が語り、行動する場所とみなします(6)。つまり、神学者は人民の知恵——これはホルヘ・ベルゴリオにとって天主の知恵を反映する——に耳を傾けなければならないのです。たとえ彼らに福音を受け入れていないとしても、です。彼は、これらの文化を、福音を「待っている石」に例えており、それは宗教的・道徳的洞察に満ち、特に詩や神話の物語において、すでに聖霊を告げる息吹を受けている、とするのです(7)。

彼の見解では、ある程度まで、先住民文化の知恵は、欧州で福音を普及させる際にギリシャ哲学が果たした役割に例えられる役割を、福音宣教において果たすべきとされています。…しかしながら、かなりの違いがあります。ギリシャ哲学は、主に信仰を表明し擁護するための合理的な手段を提供したのに対し、対照的に先住民文化は、根本的に自然主義的で内在主義的な世界観に従って、直接に宗教的な性質の要素を提供するよう運命づけられているからです。

そこから、次のような司牧計画が生まれます。

- 大衆の宗教性を、矯正すべき迷信としてではなく、神学的に伴われて省察されるべき真正な信仰の表現として受け入れる。
- 地域の伝統の豊かさと独自性を尊重しつつ、インカルチュレーションを通してその伝統に福音を根づかせる。
- 聖霊の働きを識別するために、地理的な周縁【わきに追いやられた人々】だけでなく実存的な周縁にも居場所を与える。

こうして、2001年のアルゼンチン経済危機の際、このブエノスアイレス大司教は、「新たな貧困層」や疎外された人々と会い、彼らと共に、そして彼らを通して、識別の経験を積んでいきました。この協議の実践は、その後、彼に世界規模のシノドスの道というビジョンを抱かせることになります。

### 1. 3. 「人民の神話」：歴史における集団的参加者

この数年間、ホルヘ・ベルゴリオは深い確信を抱くようになりました。それは、人民は単なる社会学的あるいは政治的な存在ではなく、歴史への参加者であり、霊的な召命を担い、根本的に罪なき(inocente)存在なのです。このため彼は、「天主の聖なる忠実な民-santo pueblo fiel de Dios」について語り、土地、住居、労働(tierra, techo, trabajo)という三つの根本的な現実に対する生来の権利を授けられている、という確信です。

このビジョンは、彼がしばしば引用していたドイツの哲学者ロドルフォ・クッシュの思想によって育まれています。

「ロドルフォ・クッシュは（中略）私に一つのことを理解させてくれた。『人民 pueblo』という言葉は論理的な言葉ではない。それは神話の言葉なのだ。（中略）人民を理解するには、その精神、心、仕事、歴史、そして伝統の神話に入り込まなければならない。（中略）民衆は論理的なカテゴリーではなく、むしろ神話のカテゴリーなのだ」（8）。

言い換えれば、人民は単なる個人の集合体ではなく、彼らは集会的な靈魂をもつ罪のない生きた現実であるとされます。この視点こそが、フランシスコが「大衆運動」に深く関わっていることを説明しています。彼は、より公正な未来への希望を、この運動に託しています。彼は、従来の代議制民主主義の枠組みを超越し、排除された人々に発言権と力を与え、真の変化への希望を担う人々に声を与えるような政治プロセスを構想しているのです。

この周囲に追いやられた人々を前にして、フランシスコは、戦争と破壊を糧とする経済システムを非難します。それは、彼の象徴的な表現によれば、「人を殺す経済(9)」です。このため、彼は現在のグローバリゼーションを、非人間的な経済論理によってもたらされた「部分にわかれた第三次世界大戦(10)」と解釈しています。

人民と、人民の権利、そして人民の歴史的使命に関するこのビジョンは、フランシスコの思想の基盤を成しています。このビジョンは、彼がインカルチュレーションに傾倒し、周囲に追いやられた人々への配慮を表明し、不当だと非難された経済構造を批判した理由を説明しています。しかし、このビジョンを普遍的な司牧プロジェクトへと変容させるには、中心となる神学的原理が必要でした。それは、教会改革の原動力であり、彼の一致についてのビジョンの鍵となる「憐れみ」です。

## 2. 憐れみ：教会の司牧的・教理的改革の原動力

フランシスコの教皇職の中核には、真の解釈の指針となるキーワード、すなわち「憐れみ」の概念があります。これは同時に、彼の神学の中心であり、改革の原動力であり、彼の最も顕著な取り組みを結びつける共通の糸でもあります。

この中心性は、彼が「プログラムの」と表現している 2013 年の勸告「福音の喜び」（*Evangelii Gaudium*）で確認されています(11)。そこにおいて、彼は、「教会の宣教的変容(12)」、すなわち、教会の構造だけでなく、この世における教会の位置づけ方や、教会の使命の捉え方についても、深い回心を目指すプロジェクトを提示しています。彼の説明によれば、「福音の核心(13)」とは憐れみであり、聖トマス・アクィナスはこれを「外的な行いに関する限り、あらゆる徳の中で最も偉大なもの(14)」と定義しました。

このビジョンは、「憐れみの特別聖年」によって完全に発展することになります(15)。大勅書「ミゼリコルディア・ヴルトゥス」（*Misericordiae vultus*）の中で、教皇はこの聖年を第二バチカン公会議と明確に結び付けてその全体的な枠組みを示し、公会議の 50 周年を記念して 12 月 8 日を聖年の開始日としました。

### 2. 1. 公会議資料における：矮小化された憐れみ

フランシスコは聖年の勅書の中で、第二バチカン公会議の二つの鍵となる訓話を引用しています。一つは、教会に対し「厳しさという武器」よりも「憐れみという救済策」を選ぶよう促したヨハネ二十三世の開会訓話(16)、もう一つは、善きサマリア人のたとえ話に「公会議の靈性の模範」を見いだしたパウロ六世の閉会訓話です。

このように、憐れみを第二バチカン公会議と結びつけることで、フランシスコは憐れみに特別な性格を与えています。それは、公会議のこの世に開かれた司牧的アプローチと深く結びつけることです。

- 彼は、キリストを何よりもまず、貧しい人、病人、疎外された人々に寄り添う、父なる天主の愛と憐れみのしるしとして提示しています。しかし彼は、キリストを、天主への無知と天主への拒絶という傷に、真理であり、世の光であり、啓示された真理の香油を注ぐことによって癒やすお方として示すことを忘れていました。実際、ご托身された御言葉によってもたらされる最初の憐れみが、まさに救いの光なのです。
- さらに、「ミゼリコルディアエ・ヴルトゥス」には、天主は「常に、惜しみなく、何の見返りも求めずに、自らのすべてを捧げる」(17)と記されています。しかし、ここには本質的な側面が欠けています。それは、天主が人間に期待しておられる応答です。聖アウグスティヌスは、すでに私たちにこう思い出させてくれています。「天主は私たちがなしに私たちが創造された。しかし、私たちがなしに私たちが救おうとはされなかった」(18)。
- 最後に、フランシスコが強調する惨めさは、主に物質的なもの、すなわち貧困、腐敗、犯罪です(19)。超自然の秩序の傷、つまり天主の拒絶としての罪は、ほとんど明確に示されていません。したがって、憐れみは地上の苦しみを癒やすことに焦点が当てられ、靈魂の靈的な癒やしは影に隠れています。

こうしたさまざまな省略は、必然的に教会の使命を根本的に再定義することにつながります。この矮小化された憐れみを通して、私たちはまさに「教会の使命的変容」を目撃しているのです。

## 2. 2. 再定義された使命：靈魂の救いから人類の進歩へ

フランシスコは「福音の喜び」の中で、「福音宣教の使命の真正かつ完璧な意味(20)：すべてのキリスト信者が（中略）より良い世界の構築に関心を示すよう求められています」(21)と概説しています。この表現は、まさに神学的な転換を表しています。教会の使命の第一の目的は、もはや靈魂の永遠の救いではなく、社会・政治構造の変容とされています。ローマーノ・アメリオは「二次的キリスト教」について語っています。つまり、超自然の秩序から切り離され、人類学的・社会的なニーズのみに焦点を当てた司牧的アプローチのことです。

フランシスコは、教会は経済的、社会的、文化的な側面において、人間の完全性を促進しなければならないと説明しています。司牧者は、社会生活に関するあらゆる問題に介入するよう求められており(22)、この関心は何よりもまず最貧困層に向けられなければならないとされます(23)。このようにして、教会は平和、環境、そして人権や市民権の擁護に尽力する、この世の目に信頼される存在となるとされます(24)。

個人的なニーズだけでなく、社会的なニーズも考慮されます。「平和は人権の尊重だけでなく、各人民の権利の尊重にも基づいています」(25)。したがって、「特に社会秩序と、共通善の追求に関連する生活の領域と側面」(26)を再考する必要があります。なぜなら、「不平等は社会悪の根源」(27)だからです。

教会がこの世の秩序に関して行う特定の行為は完全に正当ではあるものの、ここではそれらは純粋に自然的な影響に限定され、超越的な次元はありません。公会議の教会は、聖化する使命を明確に放棄することなく、本質的に国家に固有の目的を担うのです。この漸進的な変化は、教会の優先事項と、教会のこの世における立場を大きく変化させます。予期せぬ歴史的転換により、教会と国家の一致が更新されます。しかし、この一致は、かつて聖俗両剣の調和を基盤としていた、過去数世紀のキリスト教世界の特徴だったものとは、全く共通点がありません。今や、その原理と基盤を構成するのは、世俗主義そのものです。

フランシスコはこのビジョンをさらに拡大し、エキュメニズムの旗印の下に位置づけています。「憐れみには、教会の枠を超えた側面があります。それは私たちが、憐れみを天主の最も重要な属性の一つとみなすユダヤ教とイスラム教に関係づけさせます」(28)。このように、憐れみはキリスト教信仰そのものを超えて、普遍的な一致

の原理とされるのです。こうして「使命的変容」は達成されました。今や「憐れみ深い」教会は、もはや「死の影に横たわる」靈魂をあわれんだり、彼らにご托身の真理であるイエズス・キリストを説こうとしたりしません。フランシスコの憐れみには、別の目的があります。「天主の憐れみを祝うこの聖年が、これらの宗教や他の崇高な宗教的伝統との出会いを促し、私たちが互いをより深く知り、理解し合えるよう、もっと熱烈な対話へと私たちを開いてくれますように」(29)。

## 2. 3. 改革に伴う新たな神秘主義

教皇に近い助言者であるオスカル・ロドリゲス・マラディアガ枢機卿(30)は、この動向を巧みに要約しています。「教皇フランシスコと憐れみの教会」と題した講演の中で、彼は、第二バチカン公会議が制度改革を導入したのは確かだが、靈的な変容がなければ不十分だったと述べています。

「教会におけるいかなる変化も、最終的には、新たな選択肢がもたらす動機を刷新を考慮することを必要とします。教会の制度的および機能的な刷新は、その神秘的な次元の刷新を必要とします。(そしてこの神秘主義の源泉、つまり)教会の帆を深くて全面的な刷新の大海へと駆り立てる風は、憐れみなのです」。

この新たな神秘主義は、具体的な行為を通して表現されます。例えば、「家庭に関するシノドス」は、離婚して再婚した人々に対する、より柔軟な司牧的アプローチへの道を開きました。マラディアガによれば、「解体され、再び結びついた家族という現実は、教会生活に完全に参加するのを妨げるものではありません。聖体拝領が唯一の道ではありません(中略)。再婚したすべてのキリスト信者は、フルタイムのキリスト信者になることができ、彼らの家庭も天主の愛が証しする場となることができるのです」。

すでに2014年に、ヴァルター・カスパー枢機卿は、次のような問いを投げかけました。「離婚して再婚した人々に対する司牧活動において、教会はどのようにすれば忠実さと憐れみの間にある解けない絆のしるしとなることができるだろうか」(31)と。これらの考察は、根本的な変化を示しています。教理はもはや固定された枠組みではなく、憐れみの名の下に、状況に応じて解釈されるべき資源と見なされているのです。フランシスコ自身も、このことを、驚く比喩で表現しています。教理は「投げつけられる石」として使われるべきではない、というのです。

## 2. 4. 具体例：「フィドゥチア・スプリカンス」(Fiducia supplicans)

この論理は、2023年12月18日の宣言「フィドゥチア・スプリカンス」(Fiducia supplicans)において、驚くべき例を見いだします。この宣言は、歓迎と憐れみの名の下に、同性愛カップルの儀式的ではない祝福を認めています。これは単発的な行為ではありません。フランシスコは枢機卿として既に、同性カップルのシビル・ユニオンの理念を擁護していました。

ここで、それはさらに一歩進みます。すなわち、憐れみは、個人が包括的な教会に統合されることを阻む可能性のある教理上の障害を取り除きます。このように理解されるならば、憐れみは解く原理として作用し、道徳的かつ教義的教理のあらゆる規範的側面を徐々に排除していきます。それは、啓示された真理ではなく、普遍的な兄弟愛に焦点を当てた、水平的でこの世的な一致のための基盤を準備するのです。

フランシスコは憐れみを通して、教会に新たな靈的原動力を与えます。各人民を神学的拠点(locus)として、また歴史における集団的参加者として特定した彼は、超越的な真理を押し付けることなく、各人民を結集させる司牧原理を提示します。この力は、彼の教皇職における第三の主軸を開きます。それは、普遍的な兄弟愛という究極的な彼のプロジェクトの地平です。

### 3. 普遍的兄弟愛：教皇職の地平と目標

エコロジーやシノダリティといった他のテーマよりも遅れて前面に押し出された普遍的な兄弟愛は、実際には教皇フランシスコの考え方と行動の論理的な集大成であり、教皇職全体の総合としてさえ浮かび上がっています。

- 「人民の神学」がその根幹を成し、すべての人民が霊的使命の真の担い手であるという考えを中心に置いている。
- 憐れみは、すべての人々を包摂し、反対を克服することを可能にする司牧的エネルギー、すなわち原動力となっている。
- 普遍的兄弟愛は、このプロジェクト全体が目指す地平であり、究極の姿となる。

この兄弟愛の概念は、様々な文章、訓話、そして身振りに表現されていますが、最も明確に表現されているのは、2020年10月3日の回勅「フラテリ・トゥッティ」（Fratelli tutti）です。しかし、その意味を理解するには、2019年のアブダビ文書の署名という、基本的な出来事に立ち返る必要があります。この瞬間は、回勅だけでなく、フランシスコのより広範なビジョンをも照らし出しています。

#### 3. 1. アブダビ：基礎となる行動

2019年2月4日、フランシスコはアラブ首長国連邦のアブダビを訪れ、アル・アズハルのグラント・イマーム、アフマド・アル＝タイエブと共に、「世界平和と共存のための人類の兄弟愛に関する文書」に署名しました。この出来事は、いくつかの理由により歴史的な出来事です。まず教皇がアラビア半島を訪問したのは初めてだったこと、また、複数の宗教の代表者の前で、公の場で、メディアの報道も受けながら署名が行われたこと、そして、この文書自体が単なる意向の宣言ではなく、当事者双方の神学的関与を伴う文書だったことからです。

この文書は特に、「多元主義と、宗教、肌の色、性別、人種、言語の多様性は、天主が人類を創造された知恵において意図された」と述べています。このような文章表現は、単なる宗教的寛容をはるかに超えています。宗教の多元主義を天主の積極的な計画の一部として提示しているのです。この一節は、大きな論争を巻き起こしました。聖伝のカトリックの教理によれば、天主は悪や過ちを許容されるものの、それらを積極的に意図されることは決してできません。さて、宗教の多様性が天主によって意図されたものだと言断することは、天主へと至る正当な道の複数の存在をほのめかすことになり、キリストと教会の救いの唯一性に疑問を呼び起こすこととなります。

署名後、アブダビで一つの建築プロジェクト、「アブラハム・ファミリー・ハウス」が始まりました。これは、教会、シナゴグ、モスクという三つの礼拝所が隣接して建つものです。この複合施設は、フランシスコとアフマド・アル＝タイエブが署名した文書で提唱された人類の兄弟愛の目に見える象徴となることを意図しており、共有空間内部の宗教の平和的共存を可能にすることを目的としています。これは、啓示された真理ではなく、相互承認と協力に基づく一致の概念を体現しています。つまり、すべての宗教は、同じ人類の理想に向かう異なる道として、互いに寄り添い合っているということです。

フランシスコにとって、このアブダビ文書は礎石です。彼は「フラテリ・トゥッティ」の中で、この文書を回勅の直接的なインスピレーションの源泉として明確に示し、グラント・イマームと共に表明されたビジョンを再考し、発展させたいと述べています。このことが、2019年のこの出来事に、教理上および司牧上の重要かつ決定的な意義を与えているのです。

## 3. 2. 多面体システムと包摂性

フランシスコは「フラテッリ・トゥッティ」の中で、社会全体、ひいては全人類にまで及ぶべき兄弟愛について述べています(33)。その目的は、「出会いの文化」(34)と「文化的対話」(35)の中で、「誰一人排除されない社会的な友情と、すべての人に開かれた兄弟愛」を築くことです。このビジョンにおいては、教会はもはや人類の兄弟愛の唯一の源泉とはみなされていません。教会は、あらゆる文化と宗教に共通するプロジェクト、すなわち平和、正義、そして連帯というプロジェクトに奉仕する立場に立つこととなります。

フランシスコは移民の運命を特に重視しており、彼らを現代社会にとっての決定的な試金石と見なしています。「移民は(中略)祝福であり、豊かさの源であり、社会の成長を促す新たな賜物です」(36)。ですから、「壁の文化を築こうという誘惑、他の文化、他の人民との出会いを妨げるために――壁を立てる誘惑、心に壁を、土地に壁を立ち上げようとする誘惑に抵抗」(37)に抵抗する必要があるのです。壁を築くのではなく橋を架け、国境を閉じるのではなく開くのです。

フランシスコは自身のビジョンを説明するために、すでに「福音の喜び」に見られる多面体のイメージを用いています。「グローバルなものが息苦しくなる必要はなく、個別的なものが不毛になる必要もありません。(中略)そのモデルとなるのは多面体であり、それはすべての部分が収斂し、それぞれの部分がそれぞれの独自性を保持していることを反映しています」(38)。この比喩は、差異を強制的に均一へと押し込める球体と、多様性を調和のとれた全体性の中に残す多面体を対比させています。それは印象的なイメージです。多面体においては、それぞれの文化、それぞれの宗教が、共通の構築物に参加しながらも、独自のアイデンティティを保持しているのです。

しかし、このような兄弟愛の脆さを、どうして見過ごせるのでしょうか。実際、追求する一致が、すべての人を束縛する超越的な真理に根ざしていなければ、それは純粋に政治的な共存意志にのみ基づいているに過ぎません。真理の一致を脇に置きながら社会平和を夢見るとは、何と脆い兄弟愛でしょうか！

何よりも、この普遍的な兄弟愛が道徳的・社会的理想として提示されるならば、このいわゆる「包括的な社会的友情」は「すべての人に開かれている」とはいえ、実質的に天主を排除し、具体的にはキリストには閉ざされていることを認めなければなりません。実際、キリストはもはや、人類を天主とすることで天主と一致させる超越的な兄弟愛を人類に提供することが許されてはいません。キリストは、他者に対する開放性と人間性の単なる模範に成り下がり、…もはや歴史の中心にいる唯一の救い主ではなくなっています。

## 3. 3. 教会の新たな地平

したがって、この兄弟愛の概念は、教会の使命にとって広範な結果をもたらします。聖伝によれば、教会は自らを救いの箱舟とみなしており、各人民を集め、啓示された真理と超自然の生命へと導いてきました。ところがフランシスコのビジョンにおいては、一致はもはや回心と聖化によってではなく、協力と対話によって達成されるとされるのです。教会は促進者となり、世界的な兄弟愛の過程における単なる一参加者となります。教会の独自の使命は、新たな地平の方向を指し示す、より広範でより普遍的だとされる共通のプロジェクトへと吸収されるのです。

フランシスコが、「今日、私たちは皆共に救われるか、誰も救われないかのどちらかです」(39)と宣言したとき、彼は永遠の救いについて語っているのではなく、貧困、不正義、そして社会的苦しみとの闘いについて語っているのです。こうして「救い」という言葉は、この世の生活条件に焦点を当てた、この世的で内在的な意味へと矮小化されます。しかしながら、あらゆる信仰を区別なく包摂することは、福音のメッセージを真に無効化することでは、達成できません。

この発展は、政治レベルでも明らかです。フランシスコは、より強力でより効率的に組織された国際機関の創設と、世界的な課題に対処できる世界統治の推進を呼びかけています。こうして、普遍的な兄弟愛は、人権と世界的な連帯に基づく新世界秩序の基盤となり、教皇は自らを預言者であると同時に代弁者として位置づけるのです。

しかし、この兄弟愛は単なる抽象的なものではありません。具体的な領域、とりわけエコロジーにおいて形成されています。教皇は回勅「ラウダート・シ」(Laudato si)の中で、「共通の家」という概念を展開しています。地球は全人類に属する普遍的な財として提示されています。こうして環境保護は、兄弟愛を具体的に実践するための特権的な基盤となります。地球を大切にすることで、人類は互いを大切にするとされるのです。このように、環境危機は国境や分断を超越し、地球規模の連帯を育む機会となります。この収斂は、私たちの分析の次の段階、すなわち統合的エコロジーへと至ります。教皇はこれを、普遍的な兄弟愛と世界における教会の使命の不可欠な次元として提示しています。

## 4. 統合的エコロジー：普遍的な兄弟愛の具体的な表現

エコロジーは、フランシスコの教皇職における主要テーマの一つです。2015年6月18日に公布された回勅「ラウダート・シ」において体系的に提示され、フランシスコが「統合的エコロジー」と呼ぶ、より広範なビジョンの一部となっています。

この概念は、自然保護にとどまらず、人間生活の社会的、経済的、そして文化的側面を包含しています。統合的エコロジーは、現在の危機に対する地球規模の対応として、そして普遍的兄弟愛を実現できる具体的な領域として提示されています。この意味で、統合的エコロジーは、「フラテッリ・トゥッティ」とアブダビ文書に示されたプロジェクトの実践的な実施を構成するものです。

### 4. 1. 世界的な失敗に直面して、自然を超えたエコロジーに

フランシスコは、現代世界が深刻な危機に直面しているという厳しい観察から出発します。科学の進歩と経済成長は、真の幸福をもたらすどころか、深刻な不均衡を伴っています。技術と金融が政治を支配し、目先の利益の追求が社会正義と被造物への尊重よりも優先されています(41)。

「ラウダート・シ」の中で、彼は物質的発展が道徳的進歩を伴わない世界を描いています。その結果、天然資源の乱開発、広範囲にわたる汚染、動植物種の消滅、そして何よりも貧富の格差の悪化がもたらされると言います(42)。

フランシスコにとって、この危機は地球規模のものであり、地球と人間社会の両方に影響を及ぼしています。それは環境と社会生活の同時劣化を明らかにしており、彼はこれを「すべてはつながっている」(43)という表現で要約しています。エコロジーの危機と社会の危機は、同じ無秩序の二つの側面とされます。したがって、解決策は統合的エコロジーだということです。

古典的な意味での「エコロジー」という用語は、主に生物と環境との関係性を研究する学問を指します。フランシスコはこの定義を継承しつつ、特に人間に特有な側面を加えています。すなわち、統合的エコロジーは、人間が生活、都市、経済、文化、社会関係を組織化する方法を包含するとします(44)。

したがって、エコロジーの問題は森林や海洋の保護に限定されるものではありません。土地計画、労働条件、技術の利用、そしてより一般的には、人間の集団生活を構成するすべてのものに関係します。この意味で、統合的エコロジーは人文科学と社会科学を統合する試みであり、厳密な科学的な意味での政治学、社会学、経済学、文

化、そしてエコロジーを包含します。フランシスコは、環境における人類のグローバルかつ全体論的なビジョンを提示しようと努めています(45)。

このプロジェクトは、社会学をあらゆる科学の集大成とみなしたオーギュスト・コントの実証主義といった、いくつかの近代哲学を思い起こさせます。同様に、フランシスコにとって、統合的エコロジーは、人間の状態と世界における人類の地位に関する普遍的な考察の頂点として現れています。

## 4. 2. 貧困者の優先と世界統治

「ラウダート・シ」の中核には、貧困者の保護という根本的な責務ということが存在します。フランシスコは、エコロジー的な劣化と社会的不正義との密接な関連性を強調しています。環境悪化の最初の犠牲者は、まさに最も脆弱な人々、つまり過剰開発や汚染された地域に住み、自然災害にさらされている人々です。彼は、富裕国が貧困国に対して負っている「エコロジー的負債」のことについてさえも言及しています(46)。

この負債は、天然資源の略奪にとどまらず、グローバル化の社会的・経済的影響も包含しています。したがって、二つの優先事項が浮かび上がります。一つは、教会の社会教説に由来する原則である、世界的規模にまで拡張された貧困者を優先するという選択(47)、もう一つは、再生不可能なエネルギーの使用を減らし、より節度のあるライフスタイルを促進することを目的とした、開発モデルの徹底的な見直しです。

このように、フランシスコは、地球を未来の世代のために保全するため、資源利用を大幅に制限するよう求めています(48)。この環境問題に関する言い回しには、正義と連帯に関する道徳的・社会的言説が伴っています。

これらの変化を可能にするためには、地球規模で決定を執行できる構造が必要だとフランシスコは考えています。彼は、真の規制および制裁権限を付与された「国際機関の強化」に言及しています(49)。

この考えは、単なる国家間の協力にとどまりません。それは、努力を調整し、共通の基準を設定し、経済主体にルールの遵守を強制できる、世界統治の存在を伴います。このように、フランシスコは、各国が主権の一部を国際機関に委譲する、より高度な政治的統合を支持しています。

このような方向性は、彼が政治レベルで地球規模の構造の創造を志向した普遍的な兄弟愛というビジョンと一致しています。実際には、エコロジーは、この兄弟愛を実践し、築き上げるための舞台となります。環境危機は、地球規模の一致を促進するための手段として利用されます。こうして、地球の保護は、普遍的規模での政治的・社会的統合に向けたプロジェクトの口実と原動力の両方となるのです。

したがって、統合的エコロジーは、自然保護に限定されるのではなく、地球規模の結束のためのツールとなります。地球の保護という共通の大義のもとに良心を結集させると同時に、人民、文化、宗教が、そうでなければ欠如していたであろう基盤の上に結集することを可能にします。この観点から、エコロジーは普遍的な兄弟愛の具体的な表現です。それは、人類を集団的行動へと結集させることのできる、統一的なプロジェクトを提供します。

## 4. 3. エコロジー的な回心：新たな靈性

しかし、フランシスコは技術的または政治的な対策の提案にとどまりません。真の「エコロジー的な回心」をも呼びかけています。この回心は、内面的な変化、つまり考え方や行動の転換を伴います(50)。それは、すべての生き物との相互依存への意識、質素で環境に配慮した生活様式の採用、そして一人ひとりが集団的努力に関与するエコロジー的な市民権への参加へとつながります。

「ラウダート・シ」の中で、フランシスコはエコロジー的なアプローチを、強烈な霊的体験としてさえ提示しています。自然を大切にすることは、愛徳と憐れみの行い、被造物との交わり、そして他の人間との一致へとつながります(51)。この霊性は、主に自然主義的な人間観に基づいています。その目標は、もはや靈魂を天主へと高めることではなく、地球や他の生き物とのつながりを感じることです。このアプローチは、「共通の家」というイメージ、そしてアッシジの聖フランシスコが用いた「私たちの姉妹なる地球」や「母なる地球」(52)といった象徴的な言及に集約されています。

このような霊性は極めて危険です。自然と内在性を強調することで、一種の暗黙の汎神論へと陥り、そこでは天主が被造物と混同されてしまうからです。アマゾン・シノドスとパチャママのエピソードは、この危険性を如実に示し、少なくとも曖昧な儀式、さもなければ偶像崇拜の儀式を生み出しました。

究極的には、この「エコロジー的な回心」は生活様式の変革にとどまらず、新たな形の霊性、そして実際に新たな世界観を提示するものです。人間はもはや、創造主へと向かうように呼ばれた被造物としてではなく、自然という大なる全体の中における、他の要素の一つとみなされるのです。天主との交わりは、内在的に経験される被造物との水平的な交わりに置き換えられ、教会の使命は地上のバランスを維持することと融合するようになってしまいます。

しかしながら、教会の地平を再定義（普遍的な兄弟愛）し、教会の活動領域を再定義（統合的エコロジー）したのですから、フランシスコは、さらにこのプロジェクトを教会自身の中で実現するための方法を提示しなければなりません。これがシノダリティの役割であり、教会の構造を変革し、新たな使命とエコロジー的な課題に適応させることを目指すのです。

## 5. シノダリティ：教会のための新たな方法

シノダリティは、フランシスコの教皇職における最も顕著な概念の一つです。徐々に推進され、世界規模で展開される広範なプロセスの中核となりました。教皇にとって、シノダリティとは単なる制度的調整ではなく、教会論における根本的な転換、すなわち教会についての新たな考え方、そして教会の中での新たな生き方なのです。

この言葉はもともと「共に歩む」(sýn-hodós) という意味です。しかし、フランシスコにおいては、はるかに広い意味合いを帯びています。2015年10月17日に行われた司教シノドス設立50周年の訓話が、その基となる文書となっています。そこで教皇は、シノドスの教会と教会内部の権力配分についての構想を概説しています。

### 5. 1. 聖職者主義を批判：公然たる敵

フランシスコは改革を導入するために、対峙すべき敵として聖職者主義があることを指摘します。彼は聖職者主義を、教会を蝕み、信者の参加を妨げる病として提示します(53)。そして、カーストの誇り、聖職者が過度に人間的な支配を行使しようとする誘惑、そして真の司牧的愛徳の欠如といった、現実の悪弊についても言及しています。

しかし、彼の批判の範囲はそれ以上に及びます。聖職者主義を一般的な用語で非難することで、フランシスコは、キリストによって制定された聖なる権威の行使そのものに疑問を投げかけるのです。したがって、「聖職者主義」という用語は、教会内の権威の再定義を正当化する修辭的武器となっています。この悪との闘いの中で、信者への権力の委譲と位階階級の再編が正当化されるのです。

皮肉なことに、権威的に統治していると非難されることの多い教皇が、より開かれた統治を打ち立てるために聖職者の圧制を非難しているかのように見せかけているのです。

## 5. 2. 「すべての人、すべての人、すべての人」：原則としての包摂性

フランシスコの好んだこの表現は、教皇在位期間の後期に繰り返し登場します。「すべての人、すべての人、すべての人！」。これは、完全な包摂を求めるせっかちな要求を表しています。教会生活から誰一人排除されてはならない！ 離婚して再婚した人、非正規の境遇にある人、客観的に道徳に反する状況にある人でさえも排除してはならない、教会は無条件の歓迎の場でなければならない(54)、と。

この主張は、先に述べた「憐れみ」の概念と一致します。無条件の開放性として理解される憐れみは、司牧活動の最高の規範となります。シノダリティとは、この論理を制度的に翻訳したものに過ぎず、そのような包摂性を体現する構造の確立を目指します。したがって、「すべての人、すべての人、すべての人」というスローガンは、単なる感情的で普遍的な訴えではありません。教会に属するための基準の再定義を示唆する改革プログラムなのです。

## 5. 3. 大衆の信心と「人民の神学」

シノダリティもまた、大衆の信心の重要性を深く認識することに根ざしています。このテーマは、「人民の神学」との関連で既に取り上げられています。フランシスコは、信者の自発的な宗教的表現の中に、聖霊の現存のしるしを見ています。シノドスの制度においては、この大衆の信心はもはや単に容認されたり、伴われたりするものではなく、識別の正当な源泉となります。天主の民は、位階階級に依存せず、集団的な知恵を表現するよう呼ばれている(55)、とされるのです。

このビジョンは、象徴的な逆転を伴います。フランシスコ自身もピラミッド型のイメージについて語っています。聖伝による教会では、位階階級が頂点に立ち、信者を導きます。シノドスの教会では、ピラミッドは逆転し、人民が頂点に上り詰め、位階階級は彼らに奉仕する立場に置かれます。この逆転は、第二バチカン公会議で提唱された「共同責任」と「参加」の具体的な適用として提示されています。

## 5. 4. 権力の逆転

しかし、シノダリティは単なる比喻ではありません。教会内の権威の効果的な再編を伴います。フランシスコは、これを三つの権力、すなわち教える権能、統治する権能、そして聖化する権能のそれぞれにおいて実践しています。

### ◆教える権能

聖伝によると、教導権は教皇と交わりを持つ司教に属していました。これを改革するために、フランシスコは第二バチカン公会議で既に逸脱した、天主の民は「信仰において不可謬である」という定式文を用いました。

もともとこの表現は、信者が教えられて従うことで教会の不可謬性に与ることを意味していました。公会議の影響を受けて、この概念は拡大されました。民は、たとえ言葉で明確に表現できなくとも、生きた信仰の担い手とみなされるようになりました。権威はもはや頂点だけに存在するのではなく、底辺にも存在する、とされるのです。この見方では、位階階級はもはや教理の唯一の裁定者ではなく、聖霊が民の声を通じて伝えるものにも耳を傾け、それを解釈するよう努めなければならないとされます。

### ◆統治の権能

教会の統治もまた、再定義されつつあります。フランシスコは「共同責任」という概念を推進しており、これによれば、権威は位階階級と信者の間で共有されるべきです。この共同責任は、叙階された聖職者と信者の間に一定の区別があることを示すために、「区別された」と表現されることもあります。しかし、実際には、真の機能再配分につながっています(56)。

この発展の具体的なしるしは、ローマ教皇庁の各省における指導的地位に、女性と信者を任命することです。まさにこれが奉獻・使徒的生活会省で起こったことで、女性がその指揮を執りました。これは、聖伝による組織では考えられなかったことです。

#### ◆聖職権と聖化の権能

最後に、叙階の秘跡が再考の対象となります。フランシスコは、洗礼を受けたすべての者の根本的な平等性を強調し、聖職者の司祭職が信者の共通司祭職との関係において相対化されるに至っています。

このように、シノダリティは、聖職者と信者の中で特定の聖なる役割を分担することを提唱しています。以前は聖職者に留保されていた行為や決定が、今では委任を受けた信者によって行われる可能性があります。このプロセスは、両者の区別を曖昧にし、すべての人が靈魂の聖化に参加する水平的な構造を促進する傾向があります。

## 5. 5. フラット化（平面化）・水平化された教会

これら三つの発展を組み合わせることで、シノダリティは根本的な変革をもたらします。聖伝による教会は位階構造をとっており、キリストは使徒とその後継者に権威を委ね、彼らは信者の群れを導きました。シノドスの教会においては、この構造は逆転し、フラット化（平面化）されます。権威はもはや上からではなく、下から流れ出ます。教皇と司教たちは、集団的プロセスの単なる調整者、あるいは仲介者となります。

この変革は、普遍的な兄弟愛のビジョン、すなわち、排除のない社会、すべての人が平等に共同生活に参加する社会、そして位階構造や垂直性から自由な、世界的な連帯による水平的な統治と完全に一致しています。このように、シノダリティは、これまで展開されてきた原則を教会において体現したものであり、教会内で教皇のプロジェクトを効果的に実施するための適切な方法として提示されます。

## 結論：確固たる遺産、そして未来のための二律背反（ジレンマ）

フランシスコの死後、彼の遺産に対する認識は激しく対立しています。一方では、彼を決定的な改革者として認める進歩派の熱意があります。他方では、彼の取り組みを聖伝との断絶と見なす人々からの懸念、そして場合によっては公然とした反対さえあります。

逆説的ですが、このように大きく二分された背景にもかかわらず、教皇フランシスコは一致の熱心な支持者であったと結論付けることができます。彼のすべての行動は、人々を結びつけ、国々を近づけ、周縁【わきに追いやられた人々】を統合するという目標に向けられていました。

## 印象的な一貫性を持った教皇職

実際には、この一致への情熱は、二つの相補的なレベルで表現されました。教会においては、集会と変革の手段としてのシノダリティを通して、そして世界においては、人類を団結させるための具体的な舞台である統合的エコロジーを通してです。

しかし、追い求められた一致は、教会の聖伝による特徴、すなわち啓示された真理とキリストの神秘体に属することに基づく一致ではありませんでした。フランシスコのビジョンにおいて、一致は何よりも歴史の中で、水平的な次元において、協力と対話を通して達成されます。私たちは、教会が世界的な兄弟愛という広範なプロジェクトに参加するために再編成されるのを見えています。一致はもはや、共通の真理への忠実さを通して経験される現実ではなく、多様な信条と実践の中で共に歩むべき道という目標となってしまっています。

したがって、啓示された真理はもはやこの一致の基盤ではなく、より広範な普遍的プロジェクトに奉仕する一つの要素に過ぎません。したがって、フランシスコは普遍的真理の説教を通して人々を説得しようとするのではなく、行動を通して、すなわち共通のプロジェクトと象徴的な行為を通して、すなわち移民の歓迎、環境保護、貧困と排除との闘い、そして教会の内部改革の追求を通して、人々を一致させようとしています。

神学研究に関するこの小論の結論として、フランシスコの教皇職における次の五つの大きな柱が、驚くべき内的一貫性をもって浮かび上がります。

1. 「人民の神学」、これが概念的根源。
2. 憐れみ、これは司牧的かつ教義的な原動力。
3. 普遍的な兄弟愛、これは究極の地平。
4. 統合的エコロジー、これは具体的な活動領域。
5. シノダリティ、これは内的変革の方法。

この一貫性こそが、このシステムを極めて強力にし、異論を唱えることを極めて困難なものにしているのです。

## 未来：断絶か継続か？

フランシスコは、このプロジェクトを無から構想したわけではありません。彼は、第二バチカン公会議の文書に既に存在していた指針を拡張し、さらに深めたのです。「教会憲章」と「現代世界憲章」のビジョンは、フランシスコの教皇在位中に明確かつ全面的に適用されました。フランシスコは公会議の潜在的な可能性を開花させ、それを論理的な結論へと導くことに成功したと言えるでしょう。この意味で、彼の遺産は彼自身の存在をはるかに超えた連続性の中に位置づけられています。教会をより聖伝による概念へと回帰させるには、個々の要素を修正するだけでは不十分です。それは、システム全体【第二バチカン公会議】をその根底から再考することを意味します。

フランシスコの構想の強みは、まさにその一貫性と公会議に深く根ざしていることにあります。したがって、教会を現在の行き詰まりから脱却させることは容易ではありません。このような遺産を前に、教皇レオ十四世が今、重大な選択を迫られていることは明らかです。

- 公会議によって開始され、フランシスコによって発展させられた力学を継続する。すなわち、シノダリティを通して教会改革を継続し、人類を平和と正義のうちに結ぶため「共通の家」に奉仕する普遍的な兄弟愛を促進する。
- あるいは、救いの箱舟としての教会の使命に立ち返る。啓示された真理を伝え、イエズス・キリストを通して人類を至聖なる三位一体へと導くこと。これは、フランシスコの遺産、そして公会議そのものの根本的な方向性との決別を必要とする。

フランシスコの教皇職は、この二律背反を可視化し、不可避なものにしたという功績を残しました。彼の遺産が後継者によって強化され、深化されるのか、それとも、その有害な原則とともに再考され、修正されるのかは、将来明らかになるでしょう。いずれにせよ、これを無視することはできないのです。

メンツィンゲンにて

2025年10月4日

アシジの聖フランシスコの祝日にて

注：

(1) 1970年代に登場した解放神学は、ラテンアメリカ司教協議会のメデジン会議(la Conferencia de Medellín)に起源を持つ。特にマルクス主義的社会学的分析の枠組みを通じて聖書—とりわけ福音書—を再解釈する実践を推進し、急進的な社会変革を促進することを目的とした。(2) 「すべての人、集団、社会、政府を『ポピュリスト』か『非ポピュリスト』か」という二つの対立項に分類しようとするまでになってしまいました。(『フラテリ・トゥッティ(邦訳：「兄弟の皆さん」)』156項)

[https://www.vatican.va/content/dam/francesco/pdf/encyclicals/documents/papa-francesco\\_20201003\\_enciclica-fratelli-tutti\\_ja.pdf](https://www.vatican.va/content/dam/francesco/pdf/encyclicals/documents/papa-francesco_20201003_enciclica-fratelli-tutti_ja.pdf)

(3) 『フラテリ・トゥッティ』157項

(4) 同上、158項

(5) 参照：『フラテリ・トゥッティ』159項

(6) 神学的根拠 (locus) とは、神学者が神学を実践するために啓示の要素を引き出す、教会によって認められた源泉を指す。聖書、聖伝、典礼はいずれも神学的根拠 (複数形で loci) と見なされる。

(7) 『ラウダート・シ』 (145項) において、フランシスコは、先住民文化の消滅は動物や植物の種の消滅よりも深刻であると主張する。なぜならそれは、人類史に具現化された天主の英知の唯一無二の表現を消し去るからである、とされる。

(8) 2017年に出版された社会学者ドミニク・ウォルトンとの対談集『政治と社会 Politique et société』。これは近代主義という古典的カテゴリーを扱うが、その範囲を拡大している。つまり、個々の経験から民族全体の経験や文化へと与件を論理的に置き換えている。こうして宗教性は宗教の基盤とされるが、本来は逆【宗教によって宗教性が生まれる】であるというべきだったかもしれない。

(9) 『福音の喜び』53項。

(10) 2014年9月13日、レディプリア (Redipuglia) での説教。

(11) 『福音の喜び』25項。

(12) 同上、第1章。

(13) 同上、第3章。

(14) 同上、37項。

(15) 2015年12月8日から2016年11月20日まで。

(16) 第二バチカン公会議開会式訓話、Gaudet Mater Ecclesia、1962年10月11日。

(17) Misericordiae vultus、14項。

(18) 説教 169、11.13

(19) Misericordiae vultus、19項 参照。

(20) 『福音の喜び』176項。

(21) 同上、183項。

(22) 同上、187項。

(23) 同上、190番。

(24) 同上、65番。

(25) 教皇庁「正義と平和」評議会、カトリック教会の社会教説要綱、157番、福音の喜び、190番。

(26) ヨハネ・パウロ二世、教会会議後の勧告『エクレジア・イン・アメリカ』1999年1月22日、27項、『福音の喜び』182項。

(27) 『福音の喜び』202項。

(28) Misericordiae vultus、23項。

(29) 同上。

(30) 1993年から2023年までホンジュラス首都テグシガルパ (Tegucigalpa) の大司教、2001年から枢機卿。

(31) ウォルター・カスペル枢機卿、『家族の福音』、Les éditions du Cerf、パリ、2014年、55ページ。

- (32) 世界平和と共存のための人類の兄弟愛に関する文書、2019年2月4日。
- (33) 『フラテリ・トゥッティ』第94項。
- (34) 同上、第30項。
- (35) 同上、第136項。
- (36) 同上、第135項。
- (37) 同上、27項。
- (38) 『福音の喜び』235-236項。
- (39) 『フラテリ・トゥッティ』137項。
- (40) 同上、172-175項。
- (41) 『ラウダート・シ』18項、54項、56項参照。
- (42) 同上、20-22項、48項。
- (43) 同上、70項、91項、117項。
- (44) 同上、137-139項。
- (45) 同上、141-142項。
- (46) 同上、48-52項。
- (47) 同上、158項。
- (48) 同上、192項。
- (49) 同上、175項。
- (50) 同上、216-220項。
- (51) 同上、233-242項。
- (52) 同上、1項。
- (53) 『福音の喜び』102項。
- (54) 同上、47項。
- (55) 同上、122-126項。
- (56) 同上、32項。